

マラヤの Aborigines

前 田 成 文

1 マラヤにおける原住民の位置づけ

マラヤにおいて、いわゆる原住民が政府の注意をひきだしたのは、1948年から10余年続いた共産党員のゲリラ戦以来のことで、それ以前は僅かにペラ州に原住民保護の機関があっただけであった（そのせいかタイピンにある博物館の原住民——主にネグリト系、セマン系——のコレクションは素晴らしい）。コミュニス



写真1 川を渡る Mohammad 氏

トがジャングルに入りそこを拠点として活動するので、政府はジャングルやその周辺に住む住民を強制的に移住させて、完全に監視のできる新しい村を作ったわけである。ジャングルに住んでいた原住民も大方は何らかの形で Re-settled されて、政府の援助、保護を受けることができるようになったわけである。（今

年の6月、サラワクでも Kuching-Serian Road の約8,000人の中国人が強制移動させられ、彼らの福利に関して以前の生活より良くなったのか悪くなったのかが、論議されている。）

現在のマラヤにおける Welfare of the Aborigines は Federal list の中に入っており、実際には Federal の Ministry of Land and Mines の下の Aborigines Department が一切を処理していて、マラヤの各州に連邦政府役人が配置されている。但しこれはマレー半島のみで、東マレーシア（ボルネオ地域）では、すべての先住民を Native People と称して、マラヤにおけるマレー人の場合のように、彼らの生活慣習・慣習法などの取扱いは各州に任されている（Supplement to State List for Borneo States）。尚、マレーシア成立後の統計では、マレー人をも含めた先住民全体という意味で Indigineous People という語を用いるようになった。

マレー語では Aborigines というのを Orang Asli といい、Aborigines Dept. も Jabatan Orang Asli と公称されている。Asli というのは真性のとか、本来のという意味の語である。マレー人は、この Orang Asli を Jakun, Semang, Sakai などという風に区別して呼ぶが一般にそれらの語は程度の低い民を指す蔑称と受けとられ、原住民自身は直接そう呼びかけられることを好まないと聞く。しかし従来からこの3つの語を用いてマレー半島の原住民を3分することが行われているが、必ずしもその呼称の仕方が一定しているというわけではなく学者によって異なるようである。この3人種は普通、ネグリト系（セマン族）、ヴェッドイド系（サカイ族）、プロト・マレー人（モンゴロイド）系の3つであると言われる。しかし混血の度合は大きいようで異論のないわけではない。Jabatan Orang Asli では、これらの Orang Asli を20名のグループに区別して扱っている。主として言語の相違によると聞く。（北から、Kensien, Kintak, Lanoh, Jahai, Menriq, Temiar, Semai, Bateq, Semoq Beri, Jahhut, Chewong, Temoq, Semelai, Temuan, Belandas, Mah Meri, Jakun, Orang Kanaq, Orang Laut (or Orang Kuala), Orang Seletar）

1947年と1957年とのセンサスでは、原住民の数は次のようになっている。（1957 Census Report NO. 14）

表1 原住民センサス

分類 \ 年	1947	1957
Negrito	2931	841
Jakun	7429	4213
Semai	7227	12451
Semelai	1165	2821
Temiar	6710	9408
Other	9255	11626
Total	34717	41360

2 原住民調査の手掛りを求めて

これらの内北部に住む原住民の調査はかなり行なわれてはいるが、南部に住む原住民は比較的等閑視され、私の知る限りでは学術的なレポートはないようである。マレー人のコミュニティを理解するのに、このプロト・マレー人と呼ばれる人種の社会を理解する必要が痛感され、とくに一般に双系的といわれる彼らの親構造といか族組織が実際にいかに働いて、全体の社会に結びついているかが問題となる。Orang Asli の村を選択した理由は、彼らの社会構造の記述的なデータを得ることと同時に、彼らとマレー人あるいは他の地域（ボルネオ・スマトラ）のプロト・マレー人との間に continuity あるいは discontinuity 見を見つけ出したいからであった。

Jabatan Orang Asli の Commissioner, Iskandar Yusoff Carey 博士(人類学)の紹介により、ジョホール・バルの Assistant Professor, Mohd Shariff b. Mahd Noor 氏に会い、そこから目的地エンダウ川流域担当の Penolong Orang Asli, Mohamad b. Tohid 氏の協力を得て、最初の部落訪問をした。(地図参照。尚、Atlas of Southeast Asia の P. 20 の Endai は誤りで、従って、Index にも Endai が記されているが、両者とも *Endau* に訂正されるべきである。)

エンダウ川はパハン州とジョホール州との境界の一部にもなっていて、川口には Padang Endau という小さな町がある。(エンダウ区の人口、5,600人、エンダウの

町のみ、2,675人、1957 Census) 少し前迄はこのエンダウ川の支流 Sungai Sembrong に日本の鉱山があったそうだし、またエンダウの北の Rompin では鉄鉱山が今でもあるということである。このエンダウ川の源流は、3,398 フィートの高さの Gunung Besar から流れて多くの支流をあわせて東海岸に出てくる。この G. Besar の西側にも、Labis の近くにジャクンの部落があるという。Jabatan Orang Asli で Jakun と呼ぶのは、パハン州南部の一部、ジョホール、マラッカ、スグリ・スンピランに住んでいる Prot-Malaya の1グループを指す。エンダウ川流域には約8つ程のジャクンの部落が川沿いにある。その内ジョホール州側には5つの部落があり、今度の調査の対象となるのはこの5つの部落が中心である。

部落といっても、小は8戸、大は31戸の小さな集落で、すべてあわせても100戸という位であるから、調査には好都合の所である。

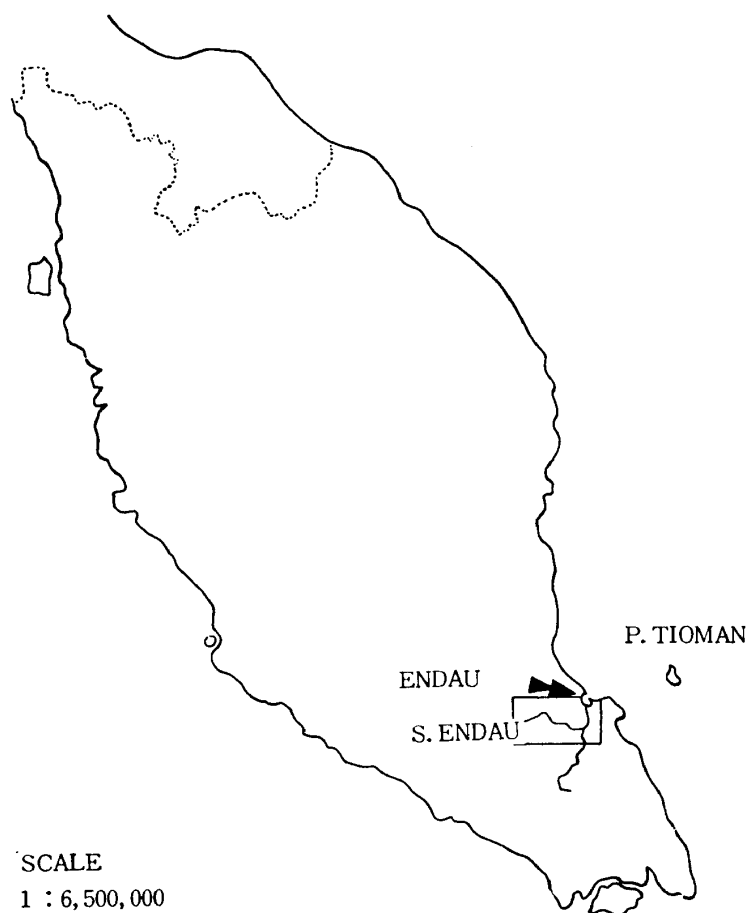


図1 エンダウの所在

表2 5つの部落の戸数と人口

部落名	戸数	人口		計
		男	女	
Labong	31	79	75	154
Jorak	30	75	61	131
Tg Tuan	14			62
Punan	8			50
Peta	17			85

Mohammad 氏調べ 1965-5-15現在

3 各部落歴訪

まず Padang Endau からモーターボートで2.30分行った所に Sungei Labong という支流が左手に流れていて、その川沿いに Labong 部落がある。部落長 (Batin) の Sela は4~50才位であろうか。シレで口をまっ赤にしている。ここにはすでに学校が立っており、今年は政府の援助でドリアン(ドリアン)の木の栽培を始めるという。この部落には水路の外に陸路でも来ることができる。交通の便などから考えても一番町との接触が多い。Mohammad 氏に言わせると、上流の部落に比べてやや怠惰だとのこと。

この部落から上流に溯ること約1時間程で、左岸に点々と小屋が見え出す。Jorak 部落である。船着場を

こしらえてあるのは、この部落だけである。Rotan が川沿いに一杯干してある。ちょうどこの部落の Batin が町に Rotan を売りに行って不在であったので、ここには長く滞在しなかった。しかし町からの遠

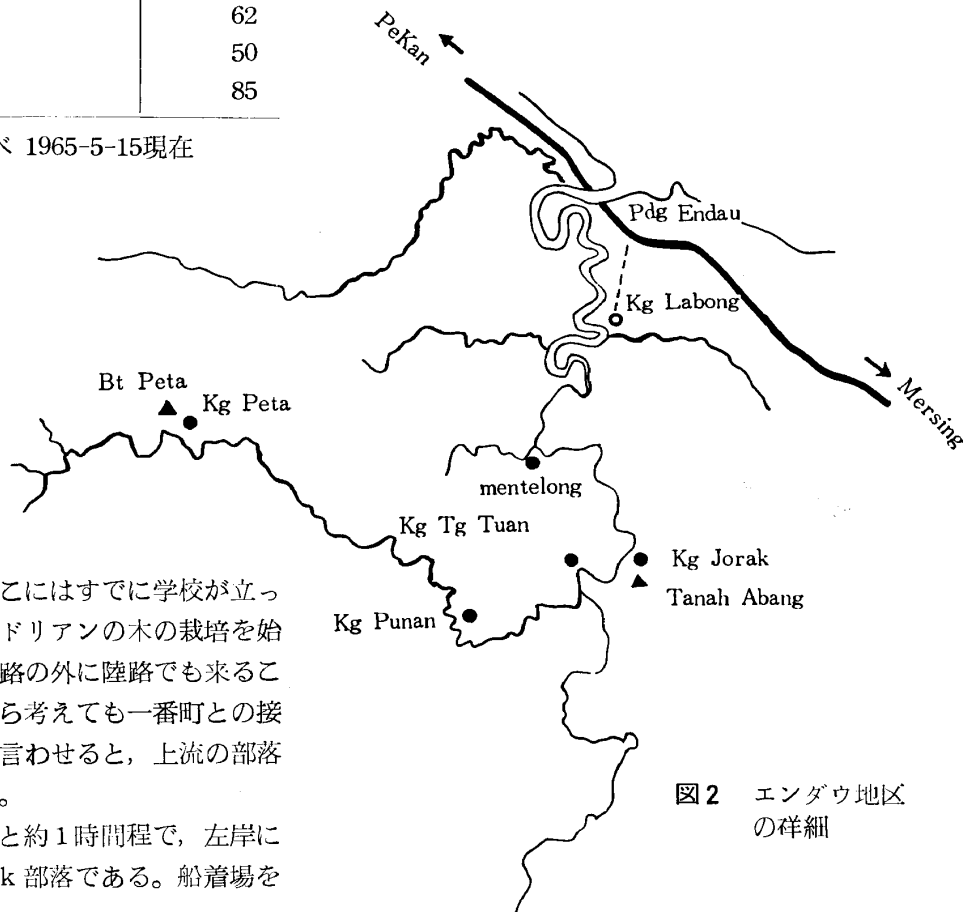


図2 エンダウ地区の詳細

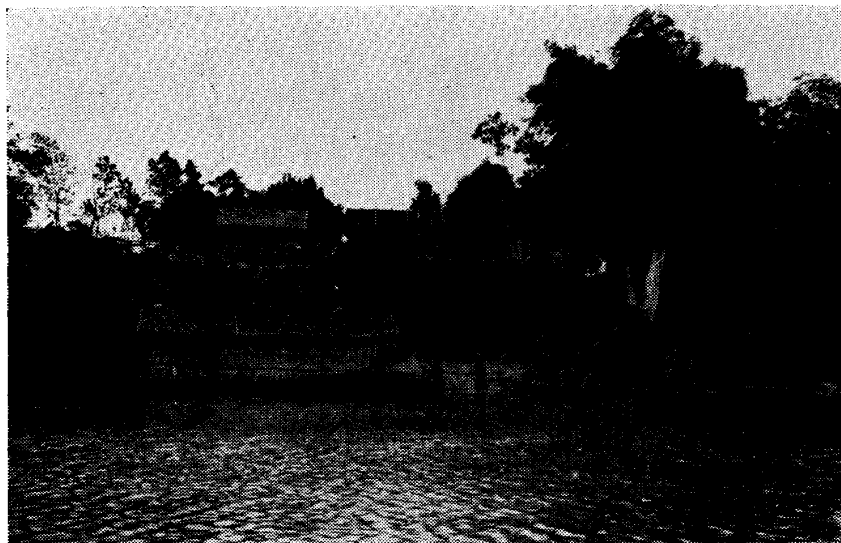


写真2 部落の家々

さ、上流の村への近さ、洪水の心配がない小高い所に位置していること、他の部落より明るい清潔な感じを受けたこと、Shariff 氏も Mohammad 氏もここを推せんしてくれたことなどから、まず最初の根拠地はここに置くことに決定した。

Jorak 部落から更に1~2時間——モーターボートのスピードによるが、政府のこのモーターボートは7年前のもので故障につぐ故障で2時間もかかった——したところに、Punan 部落という8軒からなる小部落があり、Mohammad 氏と私とは一夜をこの Batin の家で過す

ことになった。

Labong 部落を除いて井戸を掘っている部落はないので、そおっと川のなるべくまん中の方について水を汲み、それを持参のヒーターで沸かして、お茶を作る。Batin 氏が家から持ってきたマレーの菓子も出る。日も暮れると、ランプをともし、再び Mohammad 氏は川にでて晩飯を用意する。カンヅメなど持参したが、彼が家からもってきたカレーで十分だった。彼は、この職につく前（すでに10年余りたつ）には、ジャングルのコミュニスト狩りの兵隊だったそうで、足をうたれてびっこになって以来現在の職にはげんでいる。コミュニストと中国人とは彼の嫌悪の的である。非常に勤勉でしかも明るい人柄で、部落の人と膝をつきあわせて困ったこと、問題になること等を聞いてやり、良き相談相手になって、部落の人の人気も上々というところである。この夜も遅くまで、どこまでがこの Batin の土地かということ話を話していた。

日が暮れると同時に、Batin 夫妻とその娘だけだとばかり思っていたこの小さな小屋に、ジャングルに行き仕事をしてきた若者達が帰ってきて、ついには8畳位の部屋に13人にもなった。みんなゴロ寝でその側に Mohammad 氏と私も寝ることになる。ただ Batin 夫妻だけは、片隅のカヤらしきものの中に入ってしまった。

朝は日があけるかあけない内に起き、コーヒーを飲んで腹をふくらせると、みんなジャングルの中へと消えていく。Batin の奥さんは起きるなり、採集かごを背負ってジャングルへ行ってきて、何か取って帰ってきた。小さい子供は、ぶよぶよの卵を川から取ってきた。Mohammad 氏は3ドル程だして、その24個の大きな卵全部を買いとる。

4 各部落の内情

この Punan から上流は、今水が少なく、また流木が多くて、モーターボートでは到底行かれないということなので、Peta 部落へ行くのは別の機会に譲った。全体としてこの Endau 川は非常に浅くて船の航

行には適していないようである。

Punan, Peta 両部落とも、下流の村から分離してきたもので、Punan 部落は3年目、Peta 部落は1年目だということである。コミュニスト対策としての Emergency 以前は、相当数の Jakun がこの Endau 川流域に居住し、現在よりもずっと人口が多かった。しかし、Emergency の時の Re-Settlement ですべて、海岸部の Sungai Endau Kechil に移住させられ、そこでかなりの人口の減少をみた後、一部の Jakun は政府に Endau 川流域に帰ることを願い出、Labong や Tarak, Mentelong 部落が再び形成されることになった。その後、経済的に生活が苦しくなったなどの理由で、Peta, Punan のように上流の方へと分立していった。方々にすでに人のいなくなった荒

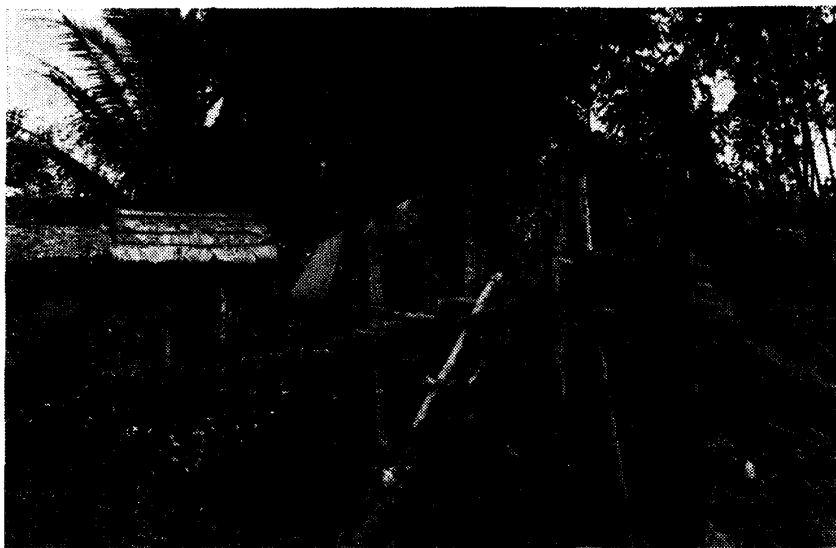


写真3 Jorak 部落の船着場

れはてた小屋が見られるのも、彼らが生活のし易い所を求めて動いていることを示している。

各部落はすべて縁者であるというが、実際にはどのような関係のものが集まり、どのようにして Peta, Punan 部落のように分立していくのか。その原因は。

一戸あたりの平均人員は4.83人とマレー人より高い率を示すが何故か。貧困の故か、伝統の故か。

男女の比率をみると、女性の方が常に低いがこれは何故か。彼らは絶滅しつつあるのか。

彼らは自分達の宗教に執着して、イスラムには改宗しようとはしていない。(Endau Kechil に住む若干の原住民はイスラムに改宗しているが、彼らの信仰は

本当のものではないと、Batin Ali は強調していた。) 従ってもっとも近い筈のマレー人コミュニティにも吸収され難く、政府の援助は受けているもののどのコミュニティからも孤立している。

ただ面白いと思ったのは、Labong と Tarak の二部落に各々2人ずつの中国人が原住民の女性と結婚して定着していることである。Mohammad 氏の説明によれば、中国人同志の結婚には婚資が非常に高くつく

ので、婚資の安いジャクンの女と結婚したのだそうだ。

外部から部落にくるのは、月に2、3度くる医者 of 回診、担当官の巡回、中国人、インド人などの鉱山を求めてくる山師などで、反対に部落から町へ出ていくのは、Batin のような人でも月に1回位、品物を求めに行く位である。ラジオ、時計、写真などを持っている反面、生活そのものは山芋を中心とする畑仕事と援集経済とに依存し、その住む小屋は、マレー人のもっとも貧困な家に匹敵するのみである。



写真4 夜なべ仕事にむしろを編む親娘。